

社会力の育成をめざして

－ 研究領域の取り組みを教育研究ブロックから考察して －

1. はじめに

社会力とは、おおまかに言うと、人と人がつながって社会をつくっていく力である。その力には、社会の運営に積極的に関わっていく力、よりよい社会をつくっていかこうとする意志・意欲、そのような社会を考える構想力、実際にその考えを実現・実行する資質能力などが含まれるが、本学校園では、社会力の育成をめざした取り組みを通して、「思いやりをもち、集団の一員であることを自覚した」姿の達成につなげていきたいと考えている。

社会力の育成に関わる研究推進の方法としては、研究領域における取り組みを教育研究ブロックという発達段階から見直していくという方法をとっている。ここで言う研究領域と教育研究ブロックとは、本学校園が独自に設定しているものであり、以下のような内容が含まれている。

- 研究領域 「保育・生活・総合的な学習の時間（以下、総合と記す）」「道徳」「特別活動」
- 教育研究ブロック 初等部前期（4歳児～小学2年，4年間）
初等部後期（小学3年～小学5年，3年間）
中等部（小学6年～中学3年，4年間）

この取り組みは、「保育・生活・総合」「道徳」「特別活動」について、教育研究ブロックからの考察を加えることで、子どもの社会力を育成する上でよりよいものにしていかこうとする取り組みであり、3つの研究領域における取り組みにより関連性と継続性をもたせていくことをめざした取り組みである。

今年度は、3つの研究領域ごとの協議を全教員で行い、その検討結果を集積して、研究領域主任と教育研究ブロック主任が集まり、検討することによって、それぞれの施策によりよい関連性と継続性をもたせていくための素案をつくることを試みている。

	初等部前期	初等部後期	中等部
保育・生活・総合			
道徳			
特別活動			

もちろんこの場合、「保育・生活・総合」「道徳」「特別活動」が本来もっているねらいを曲げてはいけないことは言うまでもない。

2. 昨年度までの活動をふりかえって ～教育研究ブロックごとの取り組み～

(1) 初等部前期ブロック

昨年度まで、この期の活動として、「わいわいランド」や「わくわくタイム」などの実践を進めてきた。幼小のなめらかな接続をめざした施策の一つとして展開してきたこの取り組みは、園児が小学校の様子を知る、子どもたちが人とのふれあいの場を広げる等の意味で、一定の成果を生み出してきた。しかし、それだけをやれば十分というわけでもない。

ほかには、現在でも行っている幼稚園から小学校へ進学する際の小学1年における、スタートカリキュラムを今一度見つめ直し、よりよいものにしていく等の指摘は、以前から繰り返されてきたものである。その際、なめらかな接続を実現するために、5歳児の3学期を含めたあり方について配慮事項等が見つかっていくと、よりよいものになるのではないかと考えられる。

また、この時期の発達段階として、道徳性の基盤を十分に養うことができているのかといった課題も指摘されてきた。幼稚園段階における、保育活動の中に含まれている道徳性の基盤について見つめ直し、重点目標を設けるなどの活動が望まれている。

(2) 初等部後期ブロック

仲間意識も強くなってくるこの時期には、ひとつの活動を行う時、学級集団を母体にするのか、学年集団を母体にして学級を解体して新しいメンバーで活動を行うのかだけを考えても、子どもたちの「まわりの人への思いやりの気持ち」、「集団としての仲間意識」を育成していくことに大きな影響を与える

ことになる。したがって、「学級のメンバーで動く」「人間関係の幅を広げられるように、学級を解体して学年で活動する」といった判断を使い分けて、活動を設定していくことがよりよい成長を促すのではないかと考えられる。そう考えると、計画されている取り組みについて、どのようなメンバーで活動すればよいかを見つめていくのもひとつの視点ではないかと考えられる。

特別活動については、学級内の係活動から、学校全体を対象とする委員会活動へと目を広げていく時期でもあるため、重点の置き方が難しい。その意味で、「これだけは重点的に」といった大切に指導事項が見つかれば、研究領域単独ではなく、現在よりも関連性のある活動が生み出せるのではないかと考えられる。

(3) 中等部ブロック

総合的な学習の時間については、小学6年の内容と中学1年の内容とのつながりを考えていかなければならない。職場体験から社会貢献活動へのながれができていく中学校の実践に、小学校の総合で扱うものが、その素地となるようにつなげていくことが現実的ではないかと考えられる。

道徳に関しては、指導したい徳目が多種多様になってくる発達段階である。一つひとつが大切にしたい徳目であることは間違いないが、そのなかでも重点的に指導することが見つかるとうい。それが、ほかの研究領域の取り組みを見つめ直す視点にもなるだろう。

特別活動では、学級だけではなく、学校全体、あるいは附属学校園全体をみて動くことが要求される段階であることから、学校行事も含めて充実したものになっているかを見つめ直す必要があるのではないだろうか。

3. 研究領域の整理 ～教育研究ブロックごとに育てたい姿・力～

今年度は、教育研究ブロックにおける昨年度までの取り組みをふまえて、「保育・生活・総合」「道徳」「特別活動」の整備を今一度行うことから始めた。そして、教育研究ブロックという発達段階からの考察を加え、3つの研究領域によりよい関連性と継続性をもたらしていきたいと考え、考察を進めてきた。その結果、以下の表にまとめられるような、大切にしたい姿、重点指導目標、力を見つけていった。

		初等部前期	初等部後期	中等部
保育生活総合	こだわり	興味・関心	自分のために、人のために	計画性、社会貢献
	人とかかわり	家族、身近の方々	地域の方々、障害のあるの方々、観光客	学校の仲間、地域の様々な立場の方々
	仲間とかかわり	目的に沿った仲間	わかり合いながら進む仲間	ともに課題を追求する仲間
	ふりかえり	できるようになった	みんなでやって良かった	自分のしたことに価値がある
道徳	〈指導重点目標〉 健康や安全に気をつけ、規則正しい生活習慣を身につけさせる。	〈指導重点目標〉 相手の立場を考えて思いやる心を育てる。	〈指導重点目標〉 勤労の尊さや意識を理解し、奉仕の精神をもって、公共の福祉と社会生活の向上、発展に貢献することができる。	
特別活動	責任感	責任感をもって行動できる力		責任力
	創意工夫	実践力		
	連帯感・所属感 自尊感情	イメージ力・創造力		受容力
	思いやり	仲間力		

4. よりよい関連性、継続性を求めて

〈「保育・生活・総合」について〉

○小学3～5年の総合に位置付いている活動は、「ひと・もの・こと」への広がりをもたせ、自然体験や社会体験などの幅広い体験を積むという意味でよい活動が設定されている。

○中学校3年間の総合については、職場体験や社会貢献活動が位置付いているが、学校だけでなく、地域社会の成立に力を注いでいる「ひと」にたくさん出会い、それらの人々から社会力に関わる力を吸収できるという意味でよい活動が構成されている。

☆幼稚園の保育、小学校の生活科において、他者意識と仲間づくりという見地から、「ひと・もの・こと」にふれる活動が十分であるかを検証する必要がある。地域の方々とどれぐらいの豊かさのあるふれあいがあるのか、出会っている教材の質を高めていくことが必要である。

☆全体的に、自然という「もの」へのかかわりが弱い。特に、初等部前期・後期の活動において、自然とのふれあいをより求めていくことができないか今一度見つめ直すべきである。

☆中学1年の総合については、中学2年で予定されている職場体験活動につながる「ひと・もの・こと」への出会いが豊かに行われるよう検討すべきである。

〈「道徳」について〉

○出会う「ひと」に関して、「身近な人」→「いろいろな相手」→「身近な集団で」→「社会生活」という広がりを設定し、子どもが暮らす集団の拡大を視野に入れてつくられた、教育研究ブロックごとの指導重点目標は、適切なものが設定されている。

☆道徳教育は、教育活動全体を通して行うことが大切である。その意味では、本当に、指導重点目標に掲げられていることが実現される取り組みになっているか、すべての活動について見守る意識が必要になる。一つひとつの取り組みが、重点目標を達成できるための取り組みになっているか、特に、学校行事や学年行事など、大勢で取り組んでいることに配慮していくことが大切である。

〈「特別活動」について〉

○当番や係活動などの学級生活を母体とした取り組みから、学校全体を母体とした取り組みまでを包含して育成したい力が整理された。大きな枠組みとして考えれば、育てたい力を整理し、そのための活動を考察できたことは、大きな成果である。

☆学級だけでなく、学年行事や学校行事において設定されている役割について、整理された力が育成できるものになっているかを検証する必要がある。例えば、幼小中の体育会が、11年間の子どもたちにとって、それぞれの発達段階に求められる力が育つ活動になっているかについて、深めていきたいところである。

☆教育研究ブロックという発達段階を意識して、育成したい力が設定された。この設定が、適切なものになっているか、実践をしながら繰り返し検討していくことが求められる。

〈「初等部前期ブロック」について〉

○道徳では、規則正しい生活習慣の育成を重視している。また、特別活動では、自尊感情をもとに責任感の芽生えや創意工夫する姿が期待されている。現在、日ごろのくらしのなかで、それらの力が育成できる活動が設定されている。

☆この時期には、適切な活動が設定されているが、その中身をじっくり検討していく必要がある。当番活動や係活動があるのは当然だが、例えば、学級生活に最低限必要な係が5歳児の学級で適切に設定されているか等は、今一度検討してみたいことである。その検討を受けると、小学校低学年の係や当番のあり方が変わる可能性がある。

☆小学1年のスタートカリキュラムの検討は以前から必要性が論じられてきたが、3つの研究領域がまとめた、その時期に重点的に育成したい力という観点も考慮し、スタートカリキュラムの内容を構成していくことが求められる。

〈「初等部後期ブロック」について〉

○特別活動の整理をみると、初等部後期の段階は、様々な力の育成が芽生え始める大切な時期である。

保育生活総合の整理をみても、「自分のために、人のために」やかかわる仲間として「わかり合いながら進む仲間」という語句が出てくる。道徳の整理をみても、「相手の立場を考えて思いやる心を育てる」と記述されている。まとめてみると、この段階は、まわりの仲間とくらしをつくりあげていく経験を豊富に積み上げていく時期であると言える。

その意味で、現在設定されている取り組みが、よいものであるかどうかを検証していくとよい。

例えば、本学校園では、この時期の活動として、4年生に林間学校、5年生に臨海学校という宿泊行事が設定されている。どちらも1泊2日の学年行事だが、4年生ではキャンプファイヤーにおける班ごとのスタンツづくりを大切に、5年生では水泳指導とともに、各係からの伝達を伝え合い、理解し合って2日間のくらしを作り出していくことを大切にしている。このような違いを明確にもち、活動に取り組んでいくことこそ、社会力の育成につながっていくと考えられる。その意味では、この2つの学年行事は、よい活動が意図的に設定されていると言える。

☆総合で取り組んでいる活動が、どのような集団で行われているのか。例えば、3～5年の総合は、学年全体で時期をそろえて取り組んでいるが、少人数でできる活動は、学級内だけのメンバー構成でよいのだろうか。例えば、5年生の「松江の魅力ガイド活動」などは、自分が松江の魅力と考えたことを調べ、その後、学級の枠をとって学年の同じテーマで調べてきた仲間と意見交換をするなどの活動をしてはどうか。そうすれば、相手の立場を思いやる心の育成にもよい影響を及ぼすし、企画力や仲間力、実践力の育成に大いに関係するだろうと考えられる。一つの活動を進めるとき、今回の整理で見つかった観点から、今後の取り組みを見つめ、指導計画をたてる際に深めていくことが大切だろう。

〈「中等部ブロック」について〉

○総合としてまとめられた取り組みは、特別活動で整理されている6つの力を育成・伸張していく上で適切な活動が設定されている。特に、職場体験活動から社会貢献活動へつながる活動では、6つの力すべてを伸張していくことが期待できる。また、道徳で重点指導目標として掲げている、主体的な奉仕の心を育成する上でも有意義な活動になっている。職場体験活動から社会貢献活動を通して取り組んだ自分自身の行動をもとにして、道徳の学習で勤労・奉仕の精神について内省化を図ることができるという面では充実した関連性の高い取り組みが行われている。

☆特別活動の整理からは、附属学校園全体や学校全体を視野に入れた取り組みが求められている。特に、学校園全体を見つめた活動は、現在、合同集会だけである。生徒会役員が、あいさつ運動の際に幼稚園や小学校で活動することはあるが、それも一部少数の生徒だけの活動である。全員が、学校園全体の暮らしを見つめた取り組みをつくり出していくことが必要である。

☆3つの研究領域で整理された育てたい力という観点からも考慮して、中学1年のスタートカリキュラムを構成していくことが求められる。

5. おわりに ～社会力の育成にとって～

社会力とは、人と人がつながってくらしをつくっていく力である。その力を養うために、必要な活動が行われているかどうか、それを点検する意味でも、3つの研究領域に設定されている活動を発達段階という視点から見つめ直してきた。

その結果、それぞれの研究領域において、「この学年の、この活動において、より深く『ひと・もの・こと』とふれることができるように工夫していこう」と、改善する方向が見い出されつつあることは、大きな成果である。今後は、具体的な実践につなげて、実際に力を育成できるのかを検証していかなければならない。それは、今回の検討をもとに、各学校園で行われている様々な学校行事や学年行事においても、計画する段階から意識して企画・起案し、実践し、検証し、改善することが必要である。いずれにしても、この取り組みは、数年かけて行わないと成果をあげることはできない。今後、取り組みの継続を図っていきたいと考えている。

(文責 陶山 昇)